

# 10年目の再建、ほろ苦く

大谷 成章（フリーライター）

剪画／とみさわかよの

カトリックたかとり教会の再建が始まった。10年前、神田浩神父は「うちは最後でいいんだ。まちが復興してから、その後でいいんだ」と言っていた。

そのころは漢字で「鷹取教会」だったが、焼け跡の敷地にバラックが建ち、ボランティアの救援基地になり、さまざまなNPOの事務所になってきた。つまり、人びとが気軽に集まる場所になっていった。ひらがなになったのは、そういう背景がある。

「ついでに扉も崩れたらよかったんだがなあ」神田神父は「ボーダレスの教会にしたいのにと、しつかり残ったレンガ扉をいまいましてそうにらんでいた。

バラックだけではなく、ペーパードームというおしゃれなホールも建った。直径33センチほどの紙の筒を柱にしたテントの屋根の多目的スペースだ。列柱がギリシャの神殿を連想させる。ここに東京の友人たちを震災見学に引っぱ

ってきて、多言語放送局「FMわいわい」や多民族交流支援の苦勞を聞いたことがある。

そのペーパードームが、台湾の集集大地震の被災地に移設されて「社区造営」（コミュニティづくり）に役立つことになった。

「たかとりに先を越された」と長田区御蔵5丁目で自動車部品販売会社を経営する田中保三さんは笑っている。まちづくりボランティア団体「まち・コミュニケーション」の顧問で、御蔵5・6・7丁目自治会の集会所の建設に尽くした。集会所は、但馬の香住から北前船の乗組員宿舎を3年がかりで移築した。

台湾から震災復興の視察にやってきた彰化縣長（県知事）が「うちにもこのように風格があり、人を集める魅力を持った建物がほしい」と言った。「まち・コミ」のメンバーが、若狭の村にある大正時代の養蚕農家を見つけてきた。台湾の建築家といっしょに解体すると、棟札に

は「大工棟梁水上寛治」と書いてあった。作家水上勉さんのお父さんだった。

紙管のペーパードームと違って、木造瓦葺を台湾に運ぶ準備は時間がかかる。そこで「たか」とりに先を越された」となるのだが、使ってもらえる期間は、より長いだろう。

田中さんの会社も全壊。たかとり教会と同じように跡地にバラック数棟を建て、救援ボランティア団体に提供した。「御蔵ボランティア村」と呼ばれていた。私は、その一棟で、入居するボランティア団体のために電灯線を取りつけたことがある。無資格の違法な作業だったかもしれないが、あのころは電気屋さんの手が足りず、待っているわけにはいかなかった。

そんなころ、田中さんも「まちが復興するまでは会社の建物は後回しだ」と、神田神父と同じことを言っていた。



詩画集「神戸、あの日より—1995・故郷」から掲載 「再開店（東灘区）」

ようやくこの夏、田中社長は再建に踏み切った。

大災害のときには、避難所だけではなく、まちの人たちが集まり、再建の方向を話しあう場所が大切だ。自治会館のような場所をもっている地域は、立ち上がりが早かった。

鷹取や御蔵のほかに、月見山自治会館を持っている西須磨地域、田中さんにあつせんしてもらってコンテナハウスを街角に置いた灘区の琵琶町などは、住民が主人公になってまちづくりを始めた。琵琶町はこれを「びわポケット」と名づけた。人びとのたまり場であり、希望や願いを集めておく場所であった。

神田神父や田中社長のほかにも、自分の仕事の拠点の再建を後回しにして、まちの復興に尽くしてきた多くの人がいると思う。

たかとり教会の周りにはまだ空き地が多い。御蔵の元の住民の「帰還率」は6割ほど。

いま神戸では、「まちの復興はまだできていないけれど……」とちよつと苦い思いをかみしめながら、そうした人たちが10年目の再建に取り組んでいる。

■大谷 成章（おおたに・しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸つ子編集者。その後、フリーライター。「阪神・淡路大震災10年」（共著、岩波新書）など。

# 「五線紙の街」――神戸を彩った人たち――



文・宮田 達夫 絵・中西省伍

集まりの名前は「バーボンクラブ」。毎月一回誰かの家で開く。開いた家の人の料理でバーボンウィスキーを飲むというのが決まりで、第一回は田宮三郎の家で、彼の手作りの牛のコンタンとキャベツのオイル漬け、牛肉の酢漬け、そしてウィスキーはバーボンデラックスという銘柄で始まった。

メンバーの人物像を紹介すると、中西省伍は中山手にサロン・ド・ナカニシというブティックをしており、デザイン学校の教授、テレビに出たり映画評論をしたり。新谷琇紀は彫刻家でお父さんが新谷英夫という神戸有数の彫刻家、妹も彫刻家という一家。

加藤隆久の家は生田神社の宮司で神社庁の永職会のメンバー。生田神社は神戸の中心をなす神社だ。この頃生田神社に福田宮司という人がいて、メディアを集めてはいろいろと企画したもの取材してもらい、生田神社の名前を広めていた。メディアの間では生田神社の外務大臣

といわれていた。竹内広光はプロ写真家で、岩宮武二の門下生。『演出家女の園の中』という宝塚歌劇の写真集を出版、御影の自宅にスタジオがある。松本幸三は二期会のオペラ歌手。若柳吉金吾は日本舞踊の家元で師匠。西正興はユ・ハイムコンフェクトの社長で特技はマッサージ。小曽根実 はジャズピアノリストでタレント。神崎夫はバー经营者。新井満はサラリーマンで作家。田宮三郎は放送局のプロデューサー。筒井康隆は作家と役者。石阪春生は「女のいる風景」というテーマで絵を描く画家。後に特例扱いで中西美代子が参加。

それに神戸の名物長老と言われた神戸文化ホール館長・松井一郎、神戸市市民局長の長島隆、元兵庫県副知事で兵庫県立近代美術館館長・樋崎四郎が参加を望んだ。松井一郎は朝日新聞出身で太っ腹な男で、夕方五時になると館長室を開放して、自称バー「九官鳥」と名付け酒を楽しんでいた。演劇界にはやたら顔がきいた。神戸文化ホールが開館当初成功したのは、松井の力が大きい。樋崎は坂井時忠知事の下で補佐をして、山登りが好きで、ヒマラヤに登山して倒れ、その後病気になる。長島は宮崎神戸市長のシンクタンクで、後にさんちかタウンの社長をしたりして、神戸は自分のテリトリーとして



いた。三人はすでに他界。

長老をのぞけばいずれも当時四十歳台前後の新進気鋭の芸術芸能家ばかり。芸術家は得てして世界が狭いといわれるが、この集団は集まれば互いにしつこく話し合いどつきあい？、互いに利害がないだけに本音で喋りあった。

当時の『月刊センター』に「現代版・村人の集い パーボンクラブ」という題で、次のように田宮三郎は書いている。

ある一室で男たちが集まってウィスキーを飲んでいました。ウィスキーの名前は「パーボン」。パーボンにもいろいろありますが、パーボンデラックスという安いウィスキー。

男1「神戸に何故にサロンがないんだろう？」

男2「こうして何となく集まってトークができる場ではないのに」

いつの間にかパーボンクラブを作ろうという話になりました。

男3「あれもこれとも言わないサロンにしたい」

男4「集団や団体になってしまつては意味が

ない。あくまでこういう雰囲気です。トークができない。あ、そうでもない」とサロンは生まれない」

男5「話題はその時決めればよい、話題がなくともいいじゃないか」

男6「こうして皆、ちがう世界で活躍している者が集まっているところに意義がある。もちろん異人館の話、トアロードの話もいい、パーボンを飲みながらコンクリート化していく神戸をどうしようと考えたのでもいい。問題意識を持てばいい。しかし目的を作ることには危険性がある」

男7「日本人は何となく寄り合うことに欠けている。神戸にいる人間がふれあえればよい」

男8「そうだ、我々がかつての神戸を知っている最後の年代なのだから」

男9「ではこんなまとめ方でどうだろうか？」

六甲山の緑と海に囲まれた神戸はファンタスティックな街です。この神戸に住んでいる人たちのふれあいの場所を私たちは求めています。違った仕事、異なった世界の人たちが何となくふれあい、お喋りができる所、こんなスペースを作ろうとしています。明日の神戸に向かって、意識の復活を求めようとしていっているのです。



メンバーによる唯一の公演



大画伯こと石阪春生さん



■宮田達夫（みやた たつ）  
一九三六年東京生まれ。毎日放送入社、大阪府警・大阪市・万国博などの記者クラブ担当。MBSナウ担当後、報道局兼事業局次長の一任のついで、放送記者として宝塚、歌舞伎を取材。イベントプロデューサーとしても活躍。元事業局長。パーボンクラブ会員。フリージャーナリスト。

# 孫

出石 アカル

絵 菅原 洸人

題字 六車明峰

「このこのコーヒー飲むようになってから、俺とこの会社いつこもええことないなあ」

朝一番にやってきて、こんな悪たれ口をたたくのは、近くに事務所を持つ建築会社の社長、反町さんである。わたしも即座に返す。

「あんたが来るようになってからや、うちの店がひまになってしもたんは」

このセリフはこの連載の最初のころに書いた。あれからもう三年になるが、彼は今も毎日のようにやって来て、毒舌ぶりは健在である。

「もうええかげんに山へ放したれよ」と言うのは、わたしの家内に対してのいつもの言葉。と



ころが今日は、「おい、アレ！」と指さして「鎖でつないどけ」と言う。さらにはほかのお客さんに対しても躊躇ない。店を出てゆこうとする老婦人の後ろ姿に向かって投げた言葉が「氣をつけなはれよ。そこ段差あるからな」である。たった3ミリほどの段差を指さして言う。それでも憎めないのは、決してハンサムとは言えない、西田敏行に似た愛嬌のある風貌のせいだろう。

その反町さんの最近の笑い話。

「俺が、血イいっぱい吐いて救急車で運ばれた時のことや。病院で気がついたら、看護婦が、

『連絡したのに奥さんまだ来られません。』  
と言うんや。明くる日になってやっと来てくれ  
たから、『なんで昨日来んかったんや』て聞い  
たら、うちの嫁はん、なんて言うたと思う？『来  
たけど、病室の入り口に、面会謝絶て書いてあ  
ったから帰った』って言いよったんや。あいつ、  
俺のなんやと思んのかやろ』

ホントに面白い人で、いつも笑わせてくれる。  
ところが、経営は結構抜かりなくやっていて、  
実はしたたかな社長さんなのである。

『居酒屋で飲んで、車では帰れんから、タクシ  
ーに乗ったんや。そしたら運転手が、偶然、A  
やったんや。ちょっと前まで社長やとった仕  
事仲間や。ごつたい借金こさえて倒産した奴や。  
そいつが言いよった。『あのころの仲間はみな  
な首つったり、どっか行つてしもたりやのに、  
お前はドしぶといのう』て』

建築関連の小さな会社は、この不況の中で次々  
と消えて行っているのに、反町さんはそつなく  
業績を上げていく様子である。

\* \*

話は変わりますが、わたし最近、爺イジにな  
りました。

昨年結婚した娘に、男の子が生まれたのです。  
ちよつと難産でしたが、お陰様で、母子ともに  
元気です。しばらくはわたしの家で静養という  
ことで、今にぎやかなことです。

かわいくてたまらないので、わたしはホッペ  
にチューをしてやるのですが、唇への接触は固  
く禁じられているのです。ピロリ菌が感染する  
から。娘は、母親の自分もしないと言うので、

わたしが禁を犯す訳にはゆきません。昔わたし  
は、その娘の唇にキッスの雨をふらせた前科が  
あるのです。それで胃病や虫菌にかかりやす  
くなったと言われているのです。で、唇のそば  
まで行つてそこで止めなければならぬのがなん  
とも辛いのです。もうわたしは欲求不満の塊に  
なつてしまっています。

その赤ん坊を店に連れて出ていた時のこと  
です。件の反町社長がやって来たのです。えらい  
ことです。

『おう、かわいいのう』は良かったのですが、『お  
母んやお爺んに似んでよかったなあ』

まあ、このあたりまでは許せますが、次の言  
葉には呆れてしまいました。

『おい、気をつけよ』と赤ん坊の頬をつつきな  
がら言うのです。『うどのだしにされんよう  
にせえよ』と。

この日は丁度、店の日替わり定食が、うどん  
だったのです。なんと言う恐ろしいことを。

この人が柄にもなく、いつも自分の孫の写真  
を持ち歩いていて、時に「ちよつとこれ見てみ」  
と見せるからおかしい。その時の顔はもうデレ  
デレです。写真の子はかわいいのですが、いた  
ずらっぽい顔が彼にそっくり。何か企んでそう  
な顔に思えてきます。わたしは彼に言います。  
『息子さんに言うたげて。『この子は絶対に爺イ  
ジに接触させずに育てるように。そやないと悪  
たれ口が感染するよ』と』

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火  
曜日」同人。兵庫県現代詩人会員。詩集「コーヒークップの耳」（編集工  
房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回フルーメル賞文学部門受賞。



# 鏡の中のサムライ

中野 順哉

絵・題字 平田 郁

昭和五十一年二月。ほぼ二年の外遊を終え帰国した僕は空港に着くと、空っぽのトランクをぼんと放り出してその上に腰掛けた。そして垢つばい首をトレンチコートの襟ですつぱりと隠し、冷たい空気を胸いっぱい吸った。

「日本の空気か…美味しいのか、美味しくないのか…」

肺にツンと針が刺さるような感覚。欧米のほうが冬は寒かったように思うが、この空気は相変わらず胸を刺す。ふと周りを見るとミニスカートをはいた女性はどうもない。みんな「大げさ」とも言えそうなロングスカートに身を包んでブーツを履いている。確か向こうに行つてすぐだったろうか、突然ロンドンでミニスカートが店頭から消えた…という話は聞いていたが、この国の感染力というのはすさまじいものだ。

「それにしても…」僕ははき捨てるように独りごちた。「ロングスカートにブーツ、そしてヘアスタイルはササンのショートの。まるで流行のデパートだな。それぞれに何の脈絡もあ

りはしない。ばらばらのパンツが陳列されている。で、この連中が家に帰ればニューファミリ―だとか言つて、はきなれないジーンズを親子してはきたがる。ペアルックか…好きになれないな。別にここを歩いている人間が特別感染力の強い連中だとは言えない。とすれば…やはりこれが平均ということか」

自然とこぶしに力が入った。やらなければいけないことが山積しているように思えた。しかし一方で本当にそれを僕はやり通せるのかという不安にもかられた。

「二年…たった二年ですつかりルパンの小野田少尉の心境かな？僕はちよつと大げさなんだよなあ」

つとめて自分を励まそうとしたが、口元は笑つていても気分は一向にぱつとしなかった。ぐいと伸びをする。重い腰をあげてタクシーに乗る。一旦は神戸の実家で過ごすことになっていた。母の申し出であった。あまり気は進まなかったが結局は厄介になることにした。

実際に二年というのはこの国にとって長い時間であったようだ。しばらく何もしないでぼんやりと日々暮らすうちに、この国のすさまじいばかりの変化が徐々に見えてきた。大学卒業者の初任給を見ても明らかだった。昭和四十七年に五万円程度だったのが、帰国してみれば倍に跳ね上がっている。物価が変わり、物の流通が変わり、生活感覚が変わる。電卓が小型軽量化

をめざし価格が安くなって家庭に入る。カメラにもコンピュータが組み込まれ、誰でもそこそこの写真がとれる。もちろん殆どがカラーテレビで、その普及率は九割を越えている。最近ではそれを録画する機械も出てきた。今は二十万円で売られているが、そのうち安くなって家庭生活の中に入ってゆくだろう。

確かパリで読んだ本の中に書いてあったと思





うが、近代化とトイレというのは密接に関係しているそう。どれほど生活が合理化しようとも人間は人間という生き物であることには違いない。つまり食事もすれば当然糞尿もする。この動物として当たり前の行為に合理化を施してはじめて人は近代化の道を進むことになる。都市が出来るためにはその前提として、地下に下水道を作り、糞尿が日常生活に登場しないようにする。そうやって生活環境は大きく変化し、人間の思考・哲学も変化してゆくのだそう。だとすればこの日本の劇的な変化はどう考えるべきなのだろう。日々生活環境が変化してゆけばそれだけ考え方も変わってくる。もしかしたらそのスピードについてゆけないから、ファッションにしてもただ流行を追いかけるだけで精一杯なのかもしれない。

電化製品も生活環境も全てパリやニューヨークの方が不便で、不潔で劣っている。決して帰国して「この国は遅れている」なんて思えない。実際「遅れ」てなんかいないのだ。ただ：「何もないだけだ」

帰国してからというもの、ぼんやりしては独り言を言っている僕を見るに見かねてある日母は、「物件を見つけたからそこを借りてお店をしなさい」と、殆ど命令のような提案をした。彼女が見つけた「店」というのはまだ真新しい新神戸駅のすぐ側で、六甲山を背景に東へ行けば王子公園へとつながる道に面した場所にあった。決して人通りが多いとはいえないが、その分高級感を演出するには適しているかもしれないと思った。結局は母に言われるがままに店を

開店する準備を始め、しばらくはそれに没頭した。そしてその年の秋にオープンできるという状態にまでこぎつけた。店の雰囲気はサスーンでもニューヨークでもなく、またパリでもなかった。

「パリは皆が見栄っ張りだから、自分の姿を鏡に映してまで楽しむ。常に緊張しているようなスペースは日本人には向かない。日本人にとって美容室は、高級でありながらも安らげる場所であつたほうが良い」

そこでパリジャンがバカンスを楽しむ南仏の別荘をイメージして、基調は白壁にした。なかなかそのイメージが職人に伝わらず骨を折ったが、仕上がりはまずまずというところだった。あれこれと口やかましく職人に指示を出し、きびきびと動きまわって店作りに没頭する僕の姿を見て、母も妹も、そして疎遠であつた兄ですら驚きの色を隠さなかった。

「留学というのは流石にすごいものだ。ふらふらしていた子がこうも変わるとは……」皆がそんな目で店の開店を心待ちにしていた。

すっかり開店準備が整つた八月の末。僕は新聞記事を片手にひょいと神戸を飛び出して夜の大阪へと向かった。行き先はある演奏会だった。その会場は聞いたこともない建物の一室。出かける前に母や知人など周りの人に聞いても「さあ」と首をかしげるばかり。結局新聞記事を頼りに自力で探すしかなかった。なんとか会場にたどり着くと冷房が壊れているのかとても暑い。もともとそう沢山のお客が入れない空間にびつしりと人が押し寄せている。

「へえ……しばらく会わないうちに随分お客さんが増えたんだなあ」

もうすっかり癖になった独り言を言いながら、「延原武春 オーボエ・バロック名曲の夕べ」と書かれたプログラムを開いた。マルチェロ、

アルビノーニ、ヘンデル、バッハ、ヴィヴァルディ……有名な作曲家の名前がずらりと並んでいる。すべてオーボエと弦楽合奏による演奏だった。もちろん曲と名前は一致しなかった。知らない曲なのか、それとも聞いたことがあるのか

すら分からなかったが懐かしい曲を聞いているような気がした。演奏が済んで控え室を訪ねると、果たして彼、延原武春はそこにいた。彼は僕を見るなり「おう！」と声をあげた。

「帰ってたんか。元氣そうやな」

映画館で出会って以来ゆつくり話したこともないのに、彼は長年付き合っている友人が戻ってきたかのように懐かしがり、食事をしないかと誘ってきた。僕は軽く首を縦にふった。近くのホテルにあるカフェで食事を取りながら、僕はロスのこと、ニューヨークのこと、そしてパリのこと、友人と別れたことなどを語った。延原は忙しくフォークを動かしながらも、じつくりと話を聞いてくれた。

「そうか……色々得るところがあったみたいやな。何よりやないか」

「まあ、そうなんだけれどね。」





でも一番驚いたのは有馬休六：僕の先生の先生  
なんだけれどね、その人のことを知っているとい  
う人物にパリで会ったんだ。その有馬休六つ  
て人は、簡単に言えばパーマネットを日本に持  
ち込んだ最初の人なんだよ。その人のこと、今  
では誰もちゃんと教えてくれないんだけれど、  
そのパリにいた爺さんは面白いことを言ってい  
た。つまり：美容師というのは芸術家でもなく、  
技師でもない。サムライの眼をもっていなくて

やならないって。そのことを有馬休六から学ん  
だんだって」  
「へえ：サムライの眼か。それはつまり、どう  
いうことなん？」延原はフォークを動かすのを  
やめて、ぐつとワインの入ったグラスを干した。  
「僕にもよく分からないんだ。最初は西洋人独  
特のオリエンタルな趣味かと思ったんだけど  
：どうも違うんだ。切腹を美しいと感じる感性。  
死を美とする感覚。そういう眼をもつて見るの





がサムライなんだって。日本の美容師はサムライがやるべきで、それだからこそ面白くなる可能性がある…なんて言うんだ。分かる？」

「いいや。でも…何となく分かる…かな」

「本当？」

「多分」

「ははははっ…やっぱり君に話して良かったよ。来月から神戸で店を始めるんだ。その前に誰かにこのことを話しておきたいと思っていた。色々考えたんだけど、君に話すのが一番かと思ってね。なんだか気分がすっきりしたよ」

僕は段々軽い気分になってゆくのを感じた。

「この国のヘアファッションに、何とか確固たる軸を持たせたい。それを自分の力で生み出したい」と意気込みばかりが空回りしていたこの半年。「流行」という言葉を聞けば聞くほど現実の壁の分厚さに打ちのめされそうになっていた。しかしこの目の前にいる男も、良く似た思いで音楽に立ち向かっている。いや、そういつたことに関しては随分先輩になるだろうが、その彼がとても気楽に構えている。まるで着慣れた服をあれこれ楽しんでるかのようだ。僕もこうでなくっちゃ。まだ着慣れない一張羅のスーツで、汗をかきながらネクタイで首を絞めているようじゃ客も寄り付かないに違いない。

そう思いながら笑顔でいる僕とは逆に、延原は静かだった。そして食事を一通り終え、コーヒーを注文すると一層まじめな顔つきになっただけだ。

「神戸で店を出すのか…大阪のほうがよくないの？」

「神戸が良いよ。神戸はね、欧米人が逆立ちをしても生み出すことの出来ない街なんだからね」

「コンテナが沢山あるからか？確かに…。今じゃ国内のシェアの五十パーセント以上が神戸やしな…トランシップ港としてもアジアの五十パーセントは神戸がその役割を担っているそうや。うん、君の見込み通り、今の神戸は上り調子やな」

延原はそう言っただけでも頷いた。しかし僕は同時に首を横にふった。

「いや全然違うよ、もっと感覚的なことだよ。神戸は西洋文化が生んだんだ。でも日本の都市としての性格を色濃く持っているんだ。そういった色彩の中で僕は新しい世界を生み出したいんだよ」

「それもサムライか？」延原はそう言っただけで運ばれてきたコーヒーに氷ごとお冷を入れてかき混ぜると、ぐっと一気に飲み干した。そして硬い表情のままこう言った。

「その有馬休六とかいう人、気になるんやっただけで墓参りでもしたらええのと違うか」

「まさか…」

僕は軽く笑って受けた。しかし延原は笑っていないかった。むしろとても真面目なことを話しているという表情だった。



■中野順哉（なかのじゅんや）  
一九七〇年生まれ、関西学院大学文学部フランス文学科卒業。日本テレマン協会代表代行。上方講談の作家でもあり、すでに二〇を超える作品が上演されている。



## サンバフェスタKOBÉ 2005

神戸の街にはやはりサンバ!サンバコンテスト「サンバフェスタKOBÉ」が7月23日にメリケンパークで開催。チビっ子からムードあふれるサンバチームまで多数参加。



みなとまつり2005  
夜空に輝く夢提灯、人々の熱気。7月16、18日「Kobe Love Floor」みなとまつり2005がメリケンパークで開催。アマテラバンドの他ゲストとして人気バンド「ギョモクセイ」がステージに登場し、大盛況。



## 「神戸発 小さなホテルの女性支配人が書いた情熱と感動の仕事術」出版記念パーティ

7月15日、ホテルアロード支配人・永末春美さんの出版記念パーティーがホテルアロードにて開かれた。書店ビジネスコーナーにてトップテン入りも!抜群のチームワークを誇るスタッフたちと。



KFS'05総会  
ファッション業界の異業種交流・コウケンサツ・サンサティ(KFS)村岡圭会長との2005年総会がサンホテルにおいて開催。



元町商店街の夏の風物詩・元町夜市が7月27日に開かれた。各商店が趣向をこらした出店が並び、商店街もいつもより熱気にあふれた。



## ムーディーな夜に歌う

サロン・ド・あいりで6月27日に開かれた翔ゆり子のショーに、合田れいがゲスト出演。(ピアノ/小田イタル)







**生田神社大海夏祭**  
8月3・5日、生田神社で大会夏祭。静山新静会風  
さやか、瀬戸内三郎などのゲストライヴやフリーマーケ  
ット、恒例のど自慢大会が開かれた。



### ドンク100周年車いす100台寄付

パンの「ドンク」が創業100周年を迎え、記念事業として車いす100台を神戸市に寄付した。8月4日、友近史夫社長が矢田神戸市長に目録を寄贈。保健福祉局を通じて市内の福祉施設などで活用される。



**王少飛作品所蔵展**  
8月2・7日ギャラリーあしそにて。非凡な才能あふれる絵画が並んだ。



### 故貝原六画伯一周忌の集い

ドン・キホーテの絵で知られた画家・貝原六さん的一  
周年忌にあたる7月29日、御影の中華料理店「黄老」で  
開催。貝原夫人を囲み、中右瑛、南和好、松本宏さん  
ら画家、門下生らが集い亡き貝原さんを偲んだ。



### クラフトアートフェア選考会

トアロードクラフトアートフェア2005は、10月8・9日に  
開かれる。8月6日に出展者の選考会が。

## ●コウベスナップ



**目の会8月スタート!**  
ジエネサラムシャバーニを楽しむ第  
1回「月の会」が8月1日、バーム  
イン「イン」で開催。



**華麗にダンスを!**  
まるでヨーロッパの宮殿でのパ  
ティ。社交ダンスパーティーが7月  
16日クオリティホテル神戸で開  
かれた。



いつかまた帰ってきたくなる  
北野の老舗レストラン

# ゲーニー北野

*Kitano Hot News*



◀どれをとっても最  
高の素材を使ったグ  
ーニーのお料理

店内に入っすぐにオー  
ンキッチンで厨房が見える。  
長年使われているこの炭  
の釜で、あの絶品・炭焼き  
ステーキが焼かれる ▼



## ■ゲーニー北野

神戸市中央区北野町2-7-18 リンズギャラリーB1F

TEL 078-242-2562

11:30~14:00 / 17:00~21:00

(ラストオーダー20:30)

月曜定休 (祝日の場合は営業・翌日休)

<http://www.gooniy.com>

元町で誕生して北野へ。今年で33年になる。多くの常連さんに愛されてきた「ゲーニー北野」。長いつきあいのある肉屋から仕入れた最高の黒毛和牛をはじめ、瀬戸内の魚介、野菜、フルーツなど、何と言ってもその素材の良さが秘訣だ。絶品の炭焼きステーキ、人気のあわびステーキの他、いくつもの料理が楽しめるムニエデキスタシオンというスタイルのコース料理には、ういのスープ、魚介のムース、シーフードサラダなど、名物料理が多数。

ディナー6000円～、ランチ4000円～とリーズナブルで、アットホームなサービスなのは町のレストランならではの喜び。



KITANO GARDEN

北野ガーデン

神戸市中央区北野町2-8-1

TEL078-241-2411 (代表)

<http://www.kitano-garden.com/>

炭焼料理 西洋料理

RESTAURANT



ゲーニー北野

神戸市中央区北野町2-7-18

リンズギャラリーB1F

TEL078-242-2562



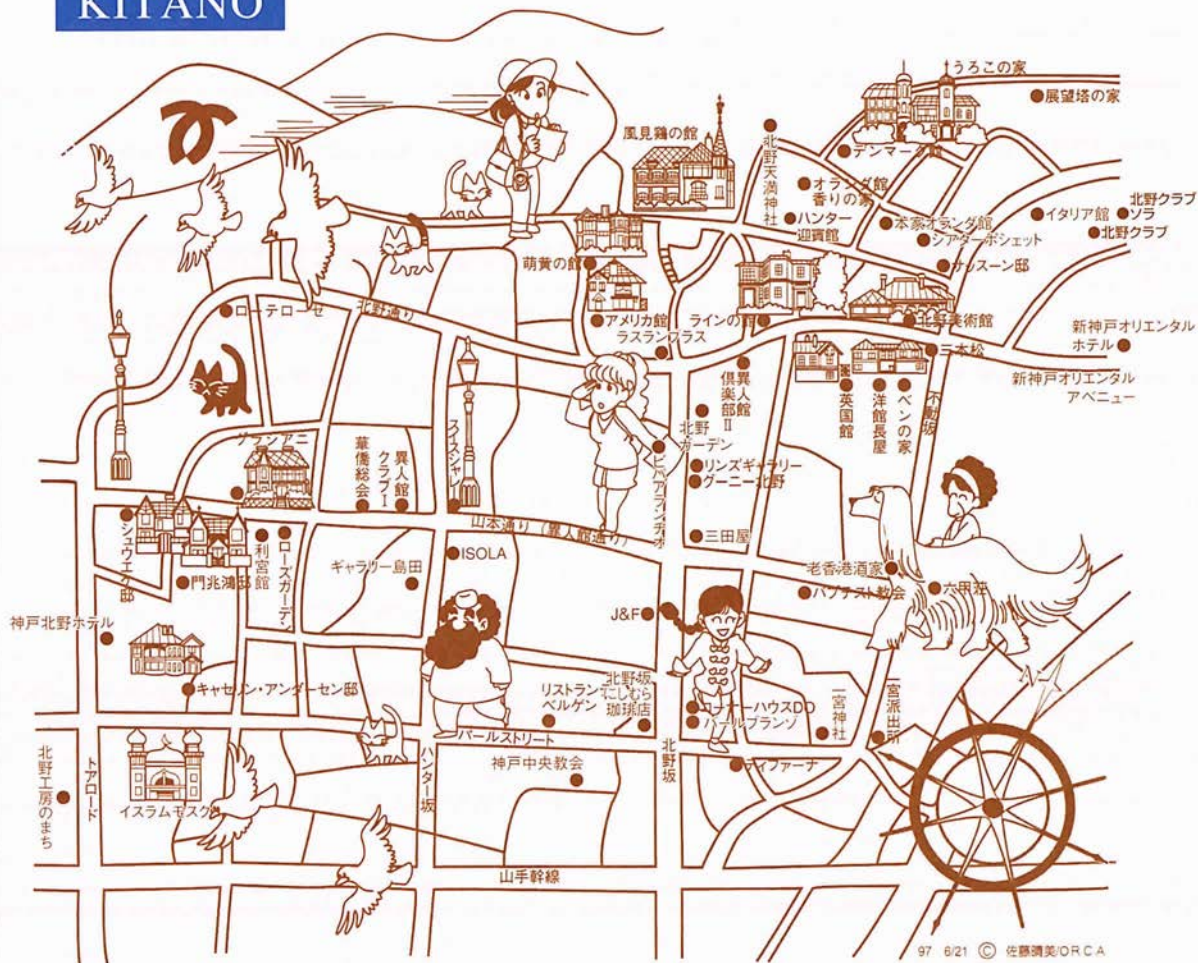
スハニッシュカフェレストラン  
ラス・ランブラス

神戸市中央区北野町3-6-17 アキラビルB1

TEL/FAX078-222-3740

<http://www.jin.ne.jp/las/>

KITANO







気品さと優雅さに満ちたNew Classic

南仏・コートダジュールの地中海を思わせる心地いい開放感と優雅な風が、気品を漂うニュークラシカルなヴィラに新たな感動を運んできます。



KITANO CLUB  
sola

address: 〒650-0002 神戸市中央区北野町1-5-4  
telephone: 078-222-5515 fax: 078-222-5524  
http://www.sola-resort.com/ e-mail: info@sola-resort.com  
hours: 平日 11:00-20:00 [水曜日休館] 土・日・祝日 10:00-20:00

燦KOBECCO PARTY  
KITANO CLUB SOLAへの誘い

秋の宴

10月3日(月) 18:00~21:30



西脇葉子

ゲスト  
ミュージシャン

グレースヴィラディナー  
お一人様 ¥17,000 (100名限定)

▼お申込み 078(265)0155  
小泉美喜子 090 3359 1792